

天岩屋神話と謡曲「絵馬」

本稿ではアマテラスとスサノヲとの争いを通して天岩屋神話の本質を日神と雨神との対立とする観点から諸説を検討し、その上で謡曲「絵馬」の主題を考えてみるとみごとに対照で天岩屋神話と呼応していることを明らかにしていこうと思う。

I

一

記紀神話に登場するスサノヲノミコト（素戔嗚尊、須佐之男命）の神格およびスサノヲが一方の主人公である天岩屋神話¹が何を表したものは一筋縄では解釈できず、多面的な要素が含まれているとされ、そのために昔から多くの説が成されて今日に至っている。

分類の一つによれば、太陽と嵐との対立にもとづく自然神話、大和朝廷と出雲氏族との対立の反映、大祓に関する信仰と儀式の反映、神祭形式の反映、天皇の本質の反映（天孫降臨神話との連接）、新嘗祭・神衣祭の反映、靈魂観の反映（墳墓、鎮魂祭、靈魂不滅）²などの説がある。

中西 裕

今日では自然神話ととらえる説よりはなんらかの儀礼の反映とする説が強く、冬至に際して太陽の復活を願う鎮魂祭の起源を語るとする説、あるいは日蝕にからむ儀礼を扱ったとする説などがある。中でも有力とされるのが鎮魂説である。

ここでは、スサノヲは水を統御する神であり、天岩屋神話は雨神＝水神であるスサノヲと日神であるアマテラスとの闘争を語るものであることを指摘し、それを成立させる前提として、当時の祈止雨³の儀礼が影響を与えたことが推定されるのではないかとの仮説を述べてみたい。

二

周知のことではあるが、これから論ずる視点にかかわる研究史をまず振り返ってみる。ということは自然神話ととらえるか、あるいは自然現象に関わる儀礼が反映されたと唱える文献に限って見てみたい。高山林次郎（樗牛）の「古事記神代卷の神話及歴史」が次のように述べていることはつとに良く知られている。

天照大御神と須佐之男命との軋轢は、神話として見れば、太陽と嵐との空中にその優劣を争ふなり。天照大御神が天岩戸に隠れ給ひしは、すなはち嵐が一時天日を蔽へるなり。須佐之男命の「神夜良比」にやらはれ、「天照大御神いでませ出生る時に高天原も葦原の中てりあか国もおのづから照明り」たるは、これ暴風退散して天日再び輝けるなり。⁴

鵲牛はここで、君主と叛臣または外敵との間の権力闘争を神話化した可能性を否定していないが、「然れどもさらにかくのごとき事実が、当時この民族の間に流布せる神話と結合し、ここに殆ど完全なる一部の太陽神話を形成せりと見ば、太古伝説の解説法としてはむしろ遙に適切なるに非ずや。」と、むしろ歴史的事実が、当時存在した神話と結合した可能性の方を重視して立論している。

これに対し論争を挑んだのが姉崎正治「素戔嗚尊の神話伝説」だった。

素戔嗚尊の神話を、殆ど一徹に驟雨神話となすの説やや勢力あるをみる。友高山「林次郎＝鵲牛」君のごときも素尊の出雲行以後と以前とを判つといへども、それ以前を以て「完全なる一部の太陽神話」となすに至りては、その説明劃一に失するの嫌ありと言はざるべからず。⁶

姉崎は、スサノオが海原を知ろしめす神と明記されているから驟雨神話ではないとする。

この神話を「天然神話」というよりはむしろ「人事神話」ととらえるのが姉崎の基本的理解である。アマテラスが天岩屋に籠ったために中つ国が悉く暗くなったことの解釈についても次のように述べる。

「暴風雨のために六合暗澹たるの状」といひ得べけん。六合暗澹は確なりとい

へども、特に暴風雨のためとなすの根拠にいたりてはつひに発見する能はず。或はこれを日蝕なりといひ、或はまた夜暗なりといひ得べきにあらずや。⁷

複数の可能性を示唆している。あるいは後述することになるスサノヲの追放の一節についても次のように述べる。

素尊が追はれて、霖雨の間に悄々青草の蓑笠を纏ひ、諸処に宿乞するとき、まさに追放人の常態にして、むしろ反対にその神の驟雨にあらざるを示せり。驟雨神話を主張する人といへども、この一条を解して驟雨後の霖雨なりとまでは牽強する能はざるべし。何となれば、驟雨神話とするも、雨神去り日神現れ六合ここに明りきといふ後に、驟雨神その人が霖雨の中に悄々彷徨せりとは、到底見る能はざればなり。⁸

その説に同意するか反対の立場を取るかは別にして、この神話の細部にいたるまでよく考え抜かれていることに感心する。

これを受けて書かれたのが高木敏雄「素尊嵐神論」である。高木は、天岩屋神話ははじめから今日見られる形ではないとの前提のもとに、天然神話として解釈するときは、アマテラスとスサノヲの軋轢が太陽と嵐との争いだとする高山鵲牛の議論に賛同する。その際に次のように付言している。

余はまた「記紀」その他の文書によりて、素戔嗚尊の天然的基础を考へ、尊を以て暴風の神なりと信ず。暴風にはたいてい雲雨の相伴ふものなれば、暴風といふ中にはおのづから雲雨をも含めるものとし、高山氏のいはゆる嵐神も、この意義ならむと信じて、高山氏の議論に賛同したり。⁹

スサノヲを暴風神ととらえず、雨の要素を持つていることをわざわざ指

摘しているのが注目される。前後の研究者が暴風神と書きながら実は暴風雨を意味している場合もあり、あまり意識していない傾向が見られるのに比して雨を重視していることがわかる。また姉崎正治説についても大筋で支持しながらも「天然的解釈」の部分を重視して立論している。

素戔鳴尊はその始においては、暴風の神なりしことを、断定せんと欲するものなり。海洋中の島嶼にありては暴風雨は、必ず海上より来る。素戔鳴尊が暴風の神にてありながら、海原の主宰神となりし的事实は、けだしこの関係によりて説明せらるべきなり。¹⁰

ずっと後年になるが、武田祐吉も「暴風神」としての性格を見ている。

須佐の男の命は、自然神としては暴風神たる性格があり、その勇猛性によって、産業破壊の事実が伝えられている。¹¹

さらに、『古事記』における畦放以下の四項目は、自然神としてのスサノヲの暴行であって、暴風の災害として見る事ができるとして、離畦・埋溝は暴風のために耕地の通水が破壊されたことを言い、¹²

自然神としての須佐の男の命が、暴風の徳を有せられることは、天照らす大神と月読の命とが目を洗うことによって出現されたとするに對して、鼻を洗うことによって出現され、また青山を枯山なす泣き枯らし、海河をことごとく泣きからしたという壮大な泣き方をなされることによって知られる。(中略)『出雲国風土記』では、命が佐世の木の葉をかざして舞ったといい、『備後国風土記』では、北海の武塔神として暴風襲来の威力を伝えている。¹³

祈念祭について「悪しき風・悪しき雨にあわぬようにする祭」とも書い

ているので雨の要素をまったく見ていないわけではないようであるが、風の神の面を重視して「石屋戸の説話は、大祓の詞の起原神話である」と結論づける。¹⁴

以上に見るようにスサノヲの神格に雨神の要素が含まれることについての論点は日本神話研究の初期にほぼ出尽くしている観がある。しかし、今日「天然的解釈」はあまりにも素朴と捉えられるためか、そのままの形では信奉されることは少なく、鎮魂祭説に見られるように、何らかの儀礼を反映するものとの説の方が優勢である。

近年になって重要な、と筆者が上記の見地から考える研究がいくつか見られるようになった。

西宮一民「スサノヲ神話の本質」¹⁵はスサノヲが自然に基づく農業神であり、具体的には二つの神格が表れているとした。その一つは「嵐神・暴風雨神」であり、もう一つは「雷神」¹⁶「刀剣神」とするものである。

さらに重要なのは古賀登の『神話と古代文化』¹⁶である。きわめて浩瀚な研究であり、スサノヲについても中国古典を引き、五行思想との関係を論じて、詳細な論を展開している。その中から行論上重要な部分だけ紹介すると、一つは天岩屋籠事件が起きたのは大嘗祭¹⁷冬至の季節ではなく、夏至であるとしていること。二つにはスサノヲが泣く様は「どうみても暴風である」として、台風をあらわしたものであり、さらにこの神が「台風の直撃する熊野の生まれであったことを示している」として、¹⁸いわば素尊嵐神論を本格的に現代に復活させていること。三つ目にはスサノヲと梅雨に注目した点である。

スサノオが高天原を追放されたのは、諸家が言うような「天つ罪」に違反し

たためではなく、田植えを前にしての「雨つつしみ（霖忌）」すなわち豊作を願うての共同体の呪的禁忌に対する侵犯によってである。時は（旧暦）五月。五月悪月だからアマテラスが天岩屋に隠れると、「万の神の声は、狭蠅那須満ち、万の妖悉に発」（『記』）きたのである。梅雨は、田植えにはどうしても必要であるが、梅雨時は高温多湿で、カビが生え、蠅がわき、疫病の流行する一番いやな季節である。（中略）後世スサノオが行疫神として怖れられるようになったのは、この神が梅雨圏熊野に生まれた神だったからである。¹⁹

この中で述べられている「雨つつしみ」は一般的には「雨つつみ」（アマツツミ）と記されて、降り続く雨に濡れるのを避けて籠居すること、雨のために外出できないことを言う。²⁰ 言い換えれば「ながめ忌み」で、五月の田植えの時の慎み、呪的禁忌であるとされる。この説はもちろん折口信夫によったもので、折口はさらに「雨つつみ」とスサノヲが犯した「天つ罪」との関連について述べているわけである。²¹ 「天つ罪」に関しての説をそのまま信じてよいものかどうかについては意見を保留したい。またスサノヲと熊野とが関係のあることは言うをまたないが、スサノヲがそこで生まれたものかどうかについても検討の余地がある。しかし、その他の点では賛同できる部分が多い。

三

アマテラスとスサノヲの神格について、前者が日神であることは研究者の間で一致しており、今さら述べるまでもない。²² それに対しスサノヲの神格は不明確である。あるいはさまざまな要素の混在がその性格を捉えがた

いものになっている。

しかし、スサノヲが水神としての性格を持っていることは明らかである。²³ まず海原を治めるようにイザナキから命じられたにもかかわらず、『古事記』によればスサノヲは「八拳鬚至于心前、啼伊佐知伎也」、成長するまで啼泣したという。涙自体が水であるが、シャーマンが泣くという行為は雨をもたらす類感呪術であるとされる。²⁴

次に『古事記』の三貴子分治の段でイザナキから「汝命者、所知海原矣」と「事依」されていることも水神としての性格を示すものである。そのことは先に示した高木敏雄の所論にも見られるとおりである。

アマテラスとの「うけひ」によってスサノヲの子として生まれた三神は『古事記』では多紀理毗売命（奥津嶋比売命）、市寸嶋比売命（狭依毗売命）、多岐都比売、『日本書紀』本文では、田心姫、湍津姫、市杵嶋姫である。田心姫の名は『日本古典文学大系』本の補注によると田霧に通じるとされ、湍津姫のタギツは水の激することを言い、市杵嶋姫はイチキシマヒメ、あるいはイツキシマヒメである。²⁵ これらの神は水に関する神であるとされている。²⁶ 三神は宗像三女神として宗像氏らの海人族によって奉斎されていた海神であり、²⁷ 海を司るスサノヲから化成することが納得できる神である。

スサノヲは「うけひ」に勝ち、そのことによって「勝佐備」に乗り、悪行を行うことになる。その悪行のうち、「離天照大神之宮田之阿」「埋其溝」が過剰な水によってなされたと考えれば、これも水の神としてのスサノヲの行為と考えることができる。

系譜の上からスサノヲを見ると、その神統譜は二つの系譜に分れるとされる。すなわち、一つは櫛名田毘売との間に生まれた子孫の系譜であり、もう一つは神大市比売との間の系譜である。このうち櫛名田毘売の子「八

島土奴美神」のそのまた子である「布波能母遅久奴須奴神」の娶ったのが「日河比売」である。日河比売は水神「淤迦美神」の女で霧の神とされる。その子の「深淵之水夜礼花神」、そのまた子の「八束水臣津野命」（淤美豆奴神）はいずれも水の神であること、神名からも明らかであろう。²⁸

天岩屋神話でアマテラスとの争闘の後、八百万神の「共議」によってスサノヲは「千位置戸」を負わされ、高天原を追放される。そのときの表現として『紀』第三の一書には「于時、霖也。素戔嗚尊、結束青草、以為笠蓑（中略）是以、風雨雖甚、不得留休、而辛苦降矣」と記されている。スサノヲ追放に際して霖雨が降り、スサノヲ自身が笠蓑を着けて「底根之国」に降って行く。風雨がはなはだき降る中を辛苦しながら歩んで行くのである。この部分について、先に見たように姉崎正治は、だからこそスサノヲは驟雨神ではないことを示すものだと言っているのだが、あまりにも字義どおりの読みである。この描写はスサノヲが雨の神であることを示すものであると考えることができる。

『紀』第三の一書はこの段について全体的に非常に詳しい描写がなされ、それはスサノヲの悪行を語る部分でも共通している。そこには次のように語られている。

是後、日神之田、有三処焉。号曰天安田・天平田・天邑并田。此皆良田。雖經霖旱、無所損傷。其素戔嗚尊之田、亦有三処。号曰天穢田・天川依田・天口銳田。此皆穢地。雨則流之。旱則焦之。

ここにも霖雨や日照りについての記述がある。日神が良田を持っていて、「霖旱」でも損傷しないのに対し、スサノヲの持っている田は雨が降れば流れ、日照りには焦けるといふ。そのためにスサノヲは妬んで姉の田を害

ることになる。

このあとスサノヲは出雲国に降り、『古事記』によればそこで「八俣遠呂智」を、十拳劔を用いて退治することになる（「切散其蛇」）。蛇が水神であることはつとに指摘されていることであり、この場合には退治するスサノヲは実は退治されるヤマタノオロチと同一であることもしばしば説かれているとおりでである。²⁹

スサノヲの行為を描いて「海河者悉泣乾」とあるのは暴風雨神とは解しがたい、「暴風あるいは暴風雨が（中略）海や河の水を涸らすということ」は到底考えることができない」との説があるが、スサノヲを単に暴風雨の神だと捉えるからそのような疑問が出てくるのである。そうではなく、スサノヲを、水を統御する性格を持つ神と捉えるのが適当だろう。

以上のようにスサノヲが水の神＝雨の神としての性格を持つことは明確である。

なお、アマテラスが天岩屋に籠ったあとの高天原は、『古事記』によれば、「皆暗、葦原中国悉闇、因此而常夜往。於是、万神之声者、狭蠅那須満、万妖悉発」った、とされる。この描写は日蝕でも夜でも通用するが、また霖雨のために起った様子としても、あるいは大雨の様子としても矛盾しない。

四

日照りが続いた場合に行われる雨乞いは今日でも民俗行事にしばしば見られる。ところが逆の場合はそれほど身近ではない。このことは、農作物を育てる上では水過多よりは水不足の方がより深刻だったことが背景とし

である。

とは言え、祈止雨の民俗行事も多数存在している。ごく一例を挙げれば、東京都大田区大森の厳正寺では毎年七月一四日の盂蘭盆会に水止舞が、東京都府中市の大国魂神社のくらやみ祭では五月一日に祈晴祭が行われている。³¹ 奈良市東山中にある日笠の天満神社では日乞いに赤毛の馬を曳いて参るという。³²

柳田國男は、大雨や長雨があったときに呪いの人形を作って流し、村全体の共同で晴を祈った、その「天気祭の破片」が「照々法師」なのだと述べている。³³ 柳田はそのルーツが中国の掃晴娘だとも説いている。宮田登は、柳田の挙げた『嬉遊笑覧』を引いて、目を付けない「てるてる法師」を作っておいて雨が止めば目鼻を付けてお祭りする風習を紹介したあとで、西日本に日和坊主という言い方があること、日和乞いをするときに白い坊主頭、雨乞いの時には黒い坊主頭の人形を作っておき、それぞれ必要なときに軒につるす習俗が見られることにも触れている。³⁴

それでは古代にはどのような儀礼が行われていたか。このことに関しては野口武司に詳しい研究がある。³⁵ この論文には六国史のうち『日本書紀』を除く五国史に見られる「祈雨」「祈止雨」記事を抜き出した表が掲載されている（『日本後紀』は欠落が多いため、その部分は『日本紀略』に拠って作成されている）。

「祈雨」記事に比べると「祈止雨」記事は一般的に非常に少ないが、野口論文はそのことを明確に示している。『続日本紀』では五七件のうち「祈止雨」は四件だけである。『日本後紀』では六三件のうち二一件、『続日本後紀』では五四件のうち一五件、『文徳天皇実録』では九件のうち五件、『三代実録』では七五件のうち二〇件となっている。なお、野口論文

には触れられていないが、『日本書紀』には「祈雨」記事はあるものの「祈止雨」記事は見られないようであり、『日本後紀』以降に増えていることがわかる。したがってこれらは「古事記」「日本書紀」に見られる天岩屋神話が記録された時代よりもあとの時代の実状を示すものである。祈雨・祈止雨儀礼の中心的な神社である大和の丹生川上神社の創祀年代にしても不明であり、祈雨における特定社として国史に現れるのは奈良時代末の天平宝字年間からであるとされる。³⁶

表（後掲）は野口論文に収められた表を参考にして、五国史の「祈止雨」関係記事だけに限定し、神事を行った神社、神事を行った理由、献上した物を抽出し再編成して示したものである。あわせて今回新たに記事の前にある関係事項、記事のあとの関係事項を拾い、それらから考えられる天候を補足した。前後の関係記事で時日が遠いものは無関係であるが、天候の推移を知るための参考として括弧つきで残した。

また、「祈止雨」は神道に限られたわけではなく、仏教儀式としても存在し、六国史にもそれが見られる。少ない数ではあるが、表の「神社など」の項目に便宜的に数件入れてあることをおことわりしておく。

表を見ると、少なくとも『続日本紀』以降の時代には「祈止雨」の儀式は「祈雨」ほどではないものの、しばしば行われていることが知られよう。では、どんなときに儀礼が行われたのか。表を見ると、大きく分けて四種類に場合分けができそうである。一つは長雨に際して「止雨」を祈る場合である。例を挙げれば『続日本後紀』天長一〇年閏七月二八日記事に「霖雨涉旬不息」、霖雨が一〇日も続いてやまない際に丹生川上神社に奉幣が行われている。『三代実録』貞観元年八月九日の記事のように「自五月至今月霖雨」、すなわち五月から八月に至るまで霖雨が続いたという極端

表 「五国史の祈止雨記事」

続日本紀

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
宝亀 3. 8. 6	伊勢神宮月読社？ (毎年九月。准荒祭神奉馬) (又荒御玉命。伊佐奈伎命 伊佐奈美命。入於官社) (又徙渡会郡神宮寺於飯高 郡度瀬山房)	異常風雨。抜樹斃屋。 卜之。伊勢月読神為祟	馬			暴風雨 (台風?)
宝亀 6. 9. 20	丹生川上、畿内群神	霖雨	白馬、幣			長雨?
宝亀 8. 5. 13	丹生川上神	霖雨	白馬			長雨?
宝亀 8. 8. 8	丹生川上神	霖雨	白馬			長雨?

日本後紀

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
延暦15. 8. 7	畿内諸 [社]	縁淫雨不晴	幣	同 15. 8. 6 大和国山崩 水溢。東大寺墙垣倒頽	延暦 15. 8. 8 遣使賑給 京中百姓。以霖雨経日。 穀価騰躍也	暴風雨 (台風?)
◆延暦17. 7. 25	丹生	祈霽	幣		(延暦 17. 8. 9 大風。壊 京中百姓廬舎。)	不明
◆延暦19. 8. 14	丹生	祈晴	白馬			不明
◆延暦22. 6. 21	丹生	為止霖雨也	幣			長雨?
◆大同 4. 5. 25	松尾、鴨御祖、鴨別雷等社	止霖雨也	幣	大同 4. 5. 22 賑給京中 人民。依霖雨也		長雨?
◆弘仁元. 5. 20	丹生川上雨師神	以霖雨経日也	幣			長雨?
◆弘仁 6. 8. 3	伊勢太神宮、賀茂大神	以霖雨不晴也	幣	同 6. 7. 25 詔曰…去五 月以降。雨水迸溢。田疇 不修。夫百姓不足。…宜 俾左右京畿内無出今年田 租…		長雨
◆弘仁10. 6. 9	丹生川上雨師神、貴布禰神	為止霖雨也	白馬			長雨?
◆弘仁10. 8. 28	貴布禰神	為止霖雨也	幣	(弘仁 10. 7. 18 詔曰。 頃者炎旱積旬。甘液無施 云々。宜令十三大寺并大 和国定額諸寺常住僧。各 於当寺三个日転読大般若 経。以祈甘雨) (弘仁 10. 7. 20 有暴風 雨損民屋) (弘仁 10. 7. 是月 自夏 不雨。諸国被害者衆)		長雨?
◆弘仁10. 8. 30	丹生川上雨師神	祈晴也	幣			不明
◆弘仁12. 6. 5	貴布禰、丹生二神	祈霽也	幣			不明
◆弘仁14. 5. 1	貴布禰神社	為止霖雨也	幣			長雨?
◆弘仁14. 5. 3	大和国雨師神社	依霖雨不止	幣、馬			長雨?
◆天長元. 8. 1	名神	祈除風雨損也	幣			不明
◆天長元. 8. 17	伊勢太神宮	為調風雨也	幣			不明
◆天長 6. 8. 27	貴布禰社、丹生河上雨師社	為停霖雨也	幣、白毛 御馬 (丹 生のみ)			長雨?
◆天長 8. 8. 5	名神	為防風雨之灾也	幣			不明
◆天長 8. 8. 13	伊勢大神宮	祈防風雨之灾也	幣			不明
◆天長 9. 7. 15	五畿内七道諸国名神	防風雨也	幣			不明
◆天長 9. 7. 22	伊勢太神宮	防風雨也	幣			不明
◆天長 9. 8. 11	明神、 又令十三大寺僧転読大般若 経	以祈止雨	幣		(天長 9. 8. 20 大雨。大 風。河内摂津两国洪水汎 溢。堤防決壊)	不明

◆は『日本紀略』による。

続日本後紀

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
天長10.閏7.28	丹生川上雨師神、松尾、賀茂上下、貴布禰社 (令大和山城二国介以上親奉幣)	霖雨涉旬不息	幣	(閏 7. 1 に洪水・大風予防のために天下諸国に名神に奉幣するようにとの勅令記事あり)		長雨
承和元. 7. 13	畿内名神 亦令諸大寺及諸国講師修法	以防淫霖	幣	承和元. 7. 12 雨水汎溢		不明
承和元. 8. 21	畿内名神	暴風大雨相并。折拔樹木壞民廬舍…祈止風雨	幣		承和元. 8. 22 夜裏風雨尚切。達旦不罷。城中人家往々倒壊	暴風雨(台風)
承和 2. 7. 2	天下名神	預攘風雨之灾	幣			予防
承和 2. 7. 5	伊勢大神宮	亦為防風雨之災也	幣			不明
承和 2. 8. 1	畿内名神、丹生川上社	是日。霖雨霽焉…以賽于禱	幣、殊奉白馬一疋(丹生川上社のみ)			長雨?
承和 4. 6. 28	山城大和等名山、五畿内七道諸国名神	勅云々。宜遣使山城大和等。奉幣名山。以祈甘雨。又勅令五畿内七道諸国奉幣名神。予防風雨。莫損年穀	幣			予防(祈雨とも)
承和 5. 8. 19	貴布禰神、丹生河上雨師神	以祈止雨也	幣、白馬	(承和 5. 8. 14 霹靂於監物前柳樹。往還人休于樹下。一男震死。一女傷脛。一童纔存。一女無恙)		不明
承和 5. 8. 28	賀茂上下、松尾、乙訓、垂水、住吉等名神	降雨殊切…以祈霽焉	幣			不明
承和 5. 9. 8	貴布禰、丹生河上雨師神	以祈止風雨也	幣、馬			不明
承和 6. 8. 7	丹生川上雨師神	祈止雨也云々	幣			不明
承和12. 5. 10	五畿内七道諸国名神	勅。比者涉旬不雨。新苗將燠。時当播殖。恐妨農業。而今嘉雨稍降。井邑趣農。不知畿外之國。如渥潤何。宜仰五畿内七道諸国。奉幣於名神。兼每社霽。令祈甘雨。若有雨降過度。必致淫害。復須奉幣祈止如初儀	幣			予防
承和14. 6. 4	松尾大神		幣	承和 14. 6. 1 内申。大風。発屋折木。雨亦降。入夜弥猛		暴風雨(台風)?
承和14. 6. 21	松尾大神	霖雨止息。先是。左相撲司伐葛野郡々家前槻樹作大鼓。有祟	幣、鼓	(承和 14. 6. 12 暴雨如懸河)		長雨?
承和15. 6. 2	雨師神社	祈止霖雨	幣	承和 15. 6. 1 連雨不停。雨勢如建瓴水		長雨?
承和15. 6. 10	五畿内七道諸国名神	勅曰。陰陽寮申云。今茲秋雨必為害者若不予防。恐損年穀…以防止雨害	幣			予防

日本文徳天皇実録

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
仁寿元. 5. 9	丹生川上雨師社	以祈霽	幣、馬	仁寿元. 5. 2 雷雨 仁寿元. 5. 4 加雨 仁寿元. 5. 8 雨水		不明
仁寿元. 6. 3	伊勢、賀茂、松尾、乙訓等神社	以祈霽。策文曰…近来雨降已止涉旬天。百姓乃農業流損奴倍之…	一		仁寿元. 6. 4 天霽	長雨
仁寿 2. 8. 1	伊勢太神宮	請止風雨	幣	仁寿 2. 7. 28 暴風雨。傷禾稼		暴風雨(台風)?
仁寿 2.閏8.29	賀茂、松尾大神等社	請以止雨	幣	仁寿 2. 閏 8. 27 大雨		不明

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
斉衡元. 7. 27	伊勢太神宮	予請止風雨			是日。暴風。発屋拔木。須臾甚雨。洪水汎溢。當時有識甚有疑恠	予防

日本三代実録

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
貞観元. 8. 9	丹生河上雨師社	自五月至今月霖雨…祈以止雨也	幣、青馬	貞観元. 5. 17 雷電雨雹。 貞観元. 5. 29 大雨。 貞観元. 6. 1 霖雨大水。 貞観元. 6. 4 霖雨未霽。賑京邑飢乏者。 貞観元. 6. 22 雷雨大風。折木発屋。 貞観元. 7. 19 雷雨。震内教坊柿樹。 貞観元. 8. 3 大雨	貞観元. 8. 12 大風雨交殺。京師人居被風壊者多。	長雨
貞観元. 9. 4	賀茂御祖、別雷、松尾、貴布禰、乙訓、稻荷等神社	祈止霖雨也	幣			長雨？
貞観元. 9. 8	山城国月読神、木嶋神、羽束志神、水主神、樺井神、和岐神、大和国大和神、石上神、大神神、一言主神、片岡神、広瀬神、龍田神、巨瀬山口神、葛木水分神、賀茂山口神、当麻山口神、大坂山口神、膽駒山口神、石村山口神、耳成山口神、養父山口神、都祁山口神、都祁水分神、長谷山口神、忍坂山口神、宇随水分神、飛鳥神、飛鳥山口神、畝火山口神、吉野山口神、吉野水分神、丹生川上神、河内国枚岡神、恩智神、和泉国大鳥神、摂津国住吉神、大依羅神、難波大社神、広田神、生田神、長田神、新屋神、垂水神、名次神	為風雨祈焉	幣		貞観元. 10. 7 畿内畿外諸国。遣使班幣於天神地祇。去九月祈無風雨之灾。誠有感徹。歳以有年。仍賽之	予防
貞観 8. 5. 8	請六十僧於紫宸殿、限以三日、転読大般若経	霖雨	一	貞観 8. 4. 是月 自朔至今。霖雨未止		長雨
貞観 9. 5. 3	畿内諸神	祈止霖雨。告文曰…而自去四月霖雨不止天。農業流損倍之…	幣	貞観 9. 4. 20 大雨	貞観 9. 5. 4 大雨洪水。往還難通	長雨
貞観10. 9. 7	十四箇神	祈止雨	幣	貞観 10. 8. 是月 霖雨 貞観 10. 9. 1 大雨	貞観 10. 9. 9 雨始霽。天皇御紫宸殿。宴于群臣。内教坊奏女楽。文人賦喜晴詩。宴竟賜禄各有差	長雨
貞観12. 6. 10	貴布禰神	自五月霖雨。至此未止…祈止雨。告文曰…近來雨降涉旬天。百姓乃農業流損倍志…	幣	貞観 12. 5. 24 延六十僧於紫宸殿。限以三日。転読大般若経。 貞観 12. 5. 26 河内国年穀不登。民苦飢饉。太政官処分。借境内富豪貯稻一万三千束。班給百姓。待秋返給		長雨
貞観12. 6. 22	賀茂御祖、別雷両社	祈止霖雨。告文曰…近來霖雨難晴天百姓乃農業頗流損世利	幣	貞観 12. 6. 17 頻月淫霖。京師飢饉。賑給之		長雨
貞観12. 7. 22	大和国三歳神、大和神、広瀬神、龍田神	遣朝使築河内国堤。恐成功未畢重有害害也…祈無雨澇。以河内水源出自大和国也	幣		貞観 12. 7. 29 山城国言。綴意郡山本郷山頽裂陷。長廿二丈。広五丈一尺。深八尺。底広四丈八尺。相去七丈。小山堆起。草木無變動。時人疑陷地入地中。更堆起成山歟	暴風雨（台風）？

年月日	神社など	理 由	奉 物	関連記事 1	関連記事 2	天 候
貞観13. 閏8. 7	諸神社	雷。大雨。諸衛陣於殿前。河水暴溢。京師道橋流損者衆。壞人廬舍不知其数…請止雨	幣		貞観 13. 閏 8. 11 霖雨未止。東京居人遭水損者卅五家百卅八人。西京六百卅家三千九百九十五人。賜穀塩各有差。貞観 13. 閏 8. 14 勅。夫積土築堤。尤為避水也。堤絶河決。其害難防。而今有聞…	暴風雨（台風）？
貞観16. 8. 17	丹生川上雨師神	是月霖雨…祈止雨	幣			長雨？
貞観16. 8. 20	賀茂御祖別雷兩社	天皇聖体乖予…奉幣祈禱告文曰…天下平安尔、風水無災之天、五穀豐登左之女給倍止…	幣			予防
貞観16. 8. 24	畿内諸神	大風雨。折樹斃屋。紫宸殿前桝。東宮紅梅。侍從局大梨等樹木有名皆吹倒。内外官舍。人民居廬。罕有全者。京邑衆水。暴長七八尺。水流迅激。直衝城下。大小橋梁無有子遺。朱雀大路豐財坊門倒覆。抱關兵士并妻子四人压死。東西河流汎溢蕩々。百姓及牛馬没溺。死者不知其数。…祈止風雨。時論或云。今年洪水。増於嘉祥元年六尺有余	幣			暴風雨（台風？）
貞観17. 7. 26	丹生川上神社	霖雨不止…祈止雨也	幣、白馬	（貞観 17. 7. 10 雷電風雨。拔樹木壞廬舍。貞観 17. 7. 12 雷雨不止）		長雨？
元慶 2. 8. 25	貴布禰、丹生河上兩社	雨猶不止…祈止雨也	白馬各一疋	元慶 2. 8. 18 大風雨。流潦泛溢。頗損田疇。		長雨？
元慶 4. 5. 22	於神泉苑、修灌頂經法、限以三日	自廿日大雨。漸没苗稼。由是…祈止雨也		元慶 4. 5. 20 快雨。…有勅議定。始自廿二日。三ケ日間。於賀茂松尾等社。將修灌頂經法。為祈雨也。崇朝遍雨。故暫停止。是時右大臣摂政。每遇水旱灾異。側身修職。欲消去之。密勿祇畏。恭事神明	元慶 4. 5. 24 霖雨始霽	不明
元慶 7. 7. 13	伊勢大神宮、賀茂御祖、別雷、松尾、稲荷、貴布禰、丹生河上、大和等神社	先是。六月廿七日鷺集大極殿鷄尾。今月三日已往霖雨淹旬。河水溢漲。内外略愁。陰陽寮占奏言。主上可患疾病。且天下將憂風水。故予祈神明。至是賽焉	幣、白馬（丹生河上のみ）			長雨
元慶 7. 9. 2	賀茂御祖、別雷、松尾、貴布禰、稲荷、乙訓、丹生川上神社	祈止雨	幣		（元慶 7. 9. 15 大雨。元慶 7. 9. 29 霖雨未止）	長雨？
仁和元. 5. 14	丹生河上神	霖雨未止…祈止雨也。告文曰…方今百姓耕種留時奈利。而自今月一日霖雨不止天農業流損へ之	幣		仁和元. 5. 20 賑給京城飢民。以霖雨也	長雨
仁和 2. 8. 7	賀茂上下、松尾、稲荷、貴布禰、丹生河上六社	自去四日霖雨。至此大風雨洪水…祈止雨	幣、白馬各一疋（丹生河上貴布禰二社のみ）			長雨 暴風雨
仁和 3. 7. 15	丹生川上雨師神	雨水…祈止霖雨也	白馬			長雨？

に長い場合もある。

二つ目は暴風雨に際して儀礼が行われるケースである。『続日本後紀』承和元年八月二日条などがそれで、「暴風大雨相并。折拔樹木壞民廬舍。由是走幣畿内名神。祈止風雨」、暴風雨を止めるために畿内名神に対して奉幣が行われている。この場合翌日の記事に書かれているように、風雨は夜になお激しく、朝になってもやまず、人家の倒壊が起っている。旧暦八月という日付から見てもおそくは台風であろう。

第三には予防としての儀礼がある。『続日本後紀』承和二年七月二日条では「預攘風雨之灾」、すなわちあらかじめ風雨の災を攘うために「天下名神」に奉幣が行われた。

四つ目には効果があった場合の感謝の儀礼がある。承和二年八月一日の「是日。霖雨霽焉。頒幣畿内名神。以賽于禱。其丹生川上社。殊奉白馬一疋」の例がそれに当るであろう。

もっとも長雨と暴風雨とは明確に分けられるものではない。『日本後紀』延暦一五年八月七日条に記された「縁淫雨不晴」、すなわち淫雨が晴れないことによって畿内諸社に奉幣が行われたのは、直接には前日六日の記事「大和国山崩水溢。東大寺牆垣倒頽」、つまり暴風雨によったためと考えられるが、翌日八日の記事に「遣使賑給京中百姓。以霖雨経日。穀餽騰躍也」、すなわち長雨が続いて穀物の価格が高騰したことにより都の人々に「賑給」を行うために遣使したとあることに見られるように、両者は相伴って記述されることがある。

したがって「霖雨」とあれば一般的に長雨であろうが、そうと記されているから儀礼の直接理由も長雨であるかについては不明確であると言わねばならない。

奉る物は通常は幣であるが、馬も捧げられている。ことに、他の神社には幣を捧げる場合でも、丹生川上神社や貴船神社には特別に馬、なかでも白馬・青馬が捧げられる場合があることが見られる。祈雨に黒毛の馬、祈止雨に白馬を供えることは模倣呪術であるとされるが、『西宮記』以来の儀式書に記されているとおりである。³⁷⁾

いずれも天岩屋神話よりあとの時代の儀礼であり、神話が記録された時代にこれらの儀礼が存在して、それが反映されたとするのは時代錯誤になるが、逆に神話が記録された時代の記録に「止雨」の儀礼の記録がないからといって、この種の儀礼が当時まったくなかったとも言えない。その意味でこの種の神事が神話の中に取り込まれた可能性はあるものと考えられる。³⁸⁾

五

では、「祈止雨」の祈願対象となった神は何か。丹生川上神社が早い時期から登場していることは表に見られるとおりである。また、貴船神社も遅れて祈願対象となっている。しかし、遠方の伊勢神宮への奉幣もしばしば行われている。おそらくはアマテラスへの奉幣なのであろう。アマテラスも「祈止雨」の祈願対象となっているらしいことは皇祖神であるよりも日神としての性格によると考えるべきである。

スサノヲはこれらの記事にまったく登場しないが、ツキヨミは現れている。『続日本紀』宝龜三年八月六日条に「異常風雨。拔樹発屋。卜之。伊勢月読神為祟。」と書かれていることは注目される。また『日本三代実録』には貞観元年九月八日条に「山城国月読神」への奉幣記事が見える。前者

の記事ではツキヨミの祟りで暴風雨が起っているとされているのである。

ツキヨミはアマテラス、スサノヲとともに三貴子の一として夜之食国を統治することになるのだが、スサノヲとツキヨミの関係は複雑で、ツキヨミの存在感が希薄であるためあって、両者が混同されている場合があることもしばしば指摘されている。アマテラスが統治するのが天上・天地・高天原と諸書で統一されているのに対し、ツキヨミとスサノヲの分治は混乱している。『古事記』ではツキヨミの統治場所は「夜之食国」であり、スサノヲは「海原」を治めることになっているのに対し（『日本書紀』第一の一書でもスサノヲが「滄海原」を治める）、『日本書紀』第六の一書では「滄海原」を治めるのはツキヨミとされる。

あるいはほぼ同じシチュエーションで食物神を殺すのが、『古事記』ではスサノヲのオオゲツヒメ殺しであるのに対し、『日本書紀』第一の一書ではツキヨミのウケモチノカミ殺しとされる。

このように、スサノヲとツキヨミの間には混乱が見られ、本来は同一神ではないかとの説がある。その点でさきに引用した『続日本紀』の記事は重要である。「常と異なる風雨」で祟りをなしたのはスサノヲであるのかもしれないのである。とすれば、祈止雨儀礼の対象はスサノヲである可能性がある。

以上述べてきたことからでは明確なことは言えない。しかし、一つの仮説ではあるが、筆者はこの天岩屋神話は日の神と雨の神との争いであり、儀礼によって再び日の神が復活するのは、これを「祈止雨」の儀礼をあらわした神話であると捉える。単なる自然神話ではなく、そこに儀礼が介在して生まれた神話であると考えたい。

II

一

謡曲「絵馬」は今日金春流以外の四流に伝わっている。その梗概は次の如くである。

時の帝（刊行会本及び宝生・金剛・喜多の諸流では淳仁天皇）に仕へ奉る臣下が勅命を奉じて伊勢参宮に旅立ち、やがて斎宮に着いた。折しも今夜は節分で、この所で絵馬を掛ける行事があるので、その様を見ようと逗留していると、老人夫婦が出て来て、雨の占方を示す黒絵馬と、日照りの占方を示す白絵馬と、互に掛け争ったが、結局万民快樂の世にしようといつて、二つの絵馬を掛け並べ、自分達は伊勢二柱の神が夫婦と現れたのであるといつて消え失せる。やがて夜になると、月光が輝いて、天照大神が天鈿女命・手力雄命を随へて影向して、自ら舞を奏し給ひ、又かの天岩戸の故事、——天鈿女命が神楽を奏して大神の御興を誘ひ奉り、手力雄命が大神の御快に縋つて引き連れ奉つて、天地は二度明らかにのどかな春となつた趣を示し給ふ。³⁹

この作については「雄大なスケールを持った作品」⁴⁰であるとする評価があるいっぽう、前場と後場の整合性については従来からきわめて厳しい見方がある。例えば金井清光が次のように述べているのはその種の評価の代表となるものである。

「絵馬」の後シテが天照大神であるのは、この能が室町以前の農耕社会の素

朴な咒術芸能の面影を伝えながらも、じつは室町以降の上層政界権力者の鑑賞に能が奉仕したところに創作または改作されたことを、みずから証明している。(中略)天照大神は農業神ではないから、絵馬奉納にこたえての豊年満作を約束するようなことは言わない。それどころか、絵馬とは無関係な岩戸がくれの故事再演となり、ツレに天鈿女命と手力雄命があらわれ、見た目にもしろいはなやかな神舞となる。(中略)前場でせっかく絵馬を捧げ豊作を祈願したのに、後場で天照大神という筋違いの神が出現したため、豊作になるかどうかはわからず、ただ「国土も豊かに月日の光の、のどけき春こそ久しけれ。」といった抽象的な祝言で終わってしまった。この後場には、豊作を予祝する咒術的要素は全くなく、ただ娯楽鑑賞の対象としての神々の舞・働きがあるばかりである。それは猿楽能が農村の咒術芸能から都市の娯楽芸能へ転化し、さらに武家貴族の儀礼芸能に変質したことの必然的結果であった。

このように現行「絵馬」は前場と後場で主題が分裂しており、酷評すれば支離滅裂の作である。しかし猿楽能が咒術芸能から娯楽芸能へ、さらに儀礼芸能へと変質していった経過を、一曲の中に包含している点において、能の学問的研究には見落すことのできない作品である。⁴¹

金井が指摘した前後の分裂につき、合理的に説明しようとする試みがたびたびなされている。近年の重要な一つは米田真理によるものである。⁴²米田は伊勢神道書や番外曲「宮川」との精緻な比較を行った。その中で、白絵馬を持つ尉と黒絵馬を持つ姥の争い、しかも前年までは絵馬を片方しか掛けなかったということから、内宮(≡天照大神≡日神)と外宮(≡豊受大神≡月神・水神)との対立・闘争と和解がこの能の構想の背景にあり、伊勢という土地の縁で天岩屋神話に触れているのではないかとの指摘をして

いる。

土地の神事を素材とし、天岩戸神話を扱うという点で〈御裳灌〉〈絵馬〉〈宮川〉は共通しており、伊勢の「ご当地もの」のパターンを示していると言えるだろう。ただし、〈御裳灌〉の場合、後場で重点が置かれているのは神話の再現そのものではなく、興玉神自身による舞である。これは、〈葛城〉や〈三輪〉が、高天原が葛城山にあったとする説や、三輪明神が天照大神と同体異名であるという、中世的な神話の理解に基づき、シテが舞う契機として天岩戸神話を用いているのと、同様の発想であろう。これに対し、〈絵馬〉と〈宮川〉は、伊勢の名所としての天岩戸にて複数の役者を登場させ、神話を忠実に再現しようとするところに特徴があり、土地との密着度はもう少し進んでいる。⁴³

きわめて簡単に要約してしまえば、伊勢との関連で、後場に天岩屋神話の再現がなされているとする主張である。

この説を踏まえて、樹下文隆が「作品研究『絵馬』」⁴⁴において詳細な検討をしている。樹下は、

確かに、絵馬と天岩戸とが一貫した主題を構成しているとは言い難い。米田氏の《宮川》先行説は、確かに興味深い見解だが、《絵馬》で天岩戸舞を見せようとした理由の説明はなお必要だろうと考える。前述したように、ワキに藤原公能を配したことから、本曲の眼目は神楽の根元としての天岩戸舞を見せることにあったのだと考えたい。⁴⁵

と述べ、さらに神楽天岩屋舞起源説が謡曲の中にしばしば登場する例を挙げたうえで、次のように結論づけている。

《絵馬》は、神楽の起源としての天岩戸舞を、舞台上に再現させるために作られた能であった。成立時期も作者も明確ではないけれど、近世以降に各地で岩戸神楽が演じられるようになったことと、《絵馬》の成立や流布とは深い関係があるに違いない。(中略)伊勢両宮を体現した天照大神が、博識の勅使、藤原公能を迎えて、神楽の根元としての天岩戸舞を再現してみせるという、構成上の一貫性や明確な主題は、作品からも読み取ることができた。⁴⁶

「絵馬」において天岩屋神話が再現されるのは神楽の起源としてのそれを取り込んだ、否、むしろそのためにこそこの作品が作られたのだとして説明しているのである。

どちらの説も詳細な研究を基にした卓論であることを認めるが、それでも伊勢という土地との関連だけで天岩屋神話を出したという説は一般的な説明に過ぎて隔靴搔痒の観があるし、天岩戸舞の再現のために作られた能だとする後者の説も作品としての構成の一貫性を説明するには不十分であると考える。別の面からの説明も可能なのではないか。

二

歴史上絵馬が登場するはるか前から馬が呪術に使われている。土製品の馬⁴⁷土馬は都城を中心とする畿内ではしばしば出土し、それらは疫神を追い払うためとも、祈雨あるいは祈止雨に用いられたのではないかとも言われている。⁴⁷

馬が祈雨あるいは祈止雨に際して奉獻されることはこれまでに見たとおりである。馬と雨の関係については不明なことが多いが、しかし、また様々

なつながりがある。⁴⁸

奉獻される馬の色について言えば、祈雨の際には黒毛、祈止雨の際には白毛が用いられた。しかし、祈止雨にはのちに赤毛馬が用いられる。その意味では日蝕に際して赤毛の馬が献上されるのは共通した精神によっていえると言えよう。⁴⁹伊場遺跡の奈良時代の地層から出土した木製馬形や板絵馬には胴のところに朱のあとが見られるものがあるという。⁵⁰

白や赤が太陽を意味していること、黒が暗黒を意味していることは明確である。この中で白が赤に変えられていくのは、あるいは白毛の馬よりも赤毛の馬の方が調達しやすいといった実理的な理由もあったのかもしれない。白い色をこのように使うことは日本以外にも見られ、インドネシアの西トラジャ、バダ地方では大降雨があるときには「白くする、罪を赦う」という儀式が行われ、白色の水牛を殺して川に流すという。⁵¹

平安時代になると木製馬形の献上が一般的になる。⁵²絵馬の発生について、従来は『本朝文粹』巻一三所収の寛弘九年六月二十五日大江匡衡が北野天神に供え物をした中に「色絵絵馬三疋」とあるのをもって、平安時代中期に絵馬が存在するのが絵馬の早いものとされていたが、伊場遺跡で絵馬が発見されたことで、八世紀後半には絵馬があったとされるに至った。⁵³

中世になると、絵巻にも明確に描かれてくるようになる。『年中行事絵巻』には馬の毛色は判別できないが、二枚一組で吊るされている様子が描かれている。⁵⁴この事情を背景にして謡曲「絵馬」も作られることになる。

三

前半で述べたように、筆者はアマテラスとスサノヲとの争い、すなわち

日の神と雨の神との争闘の結果、日の神が勝利するという天岩屋神話はすなわち「祈止雨」の神事との関係でとらえるべきものだと考える。天岩屋神話は日神と水神＝雨神との対立を語り、祈止雨の祭祀によって日神が復活し、太陽と雨との調和が再び実現することを語っているのである。その場合、神話において日神と雨神とが元来アマテラスとスサノヲであったとは限らない。登場する神をこの二柱にしたのは後の時代であるかもしれないが、「祈止雨」神事がその背後に存在したのではないか。

謡曲「絵馬」の前半では黒絵馬を掛けて雨を、白絵馬を掛けて太陽を乞うことを語り、調和をとるためにこの年から両方の絵馬を掛けることとなる。そのいわれを具体的に説明するために、本来日神と雨神との対立である天岩屋神話の再現が後半でなされているのである。そう捉えてこそこの作品の本質が理解される。

「絵馬」の作者は不明とされるが、この作者には天岩屋神話の本質がわかっていったものと想像される。あるいは作品が作られた当時にはまだこの神話の本質が周知の事実だったのかもしれない。

ただし、そう考えた場合、この謡曲におけるスサノヲの不在の意味は別に考えなければならない。すでに見たように、六国史の「祈止雨」のための奉幣記事にもスサノヲは直接には登場してこなかった。「祈雨」の儀礼記事にもスサノヲは出てこないようである。どちらの場合にも祈禱対象として登場することの多い丹生川上神社の祭神は高竈神、罔象女神、たかおかみのかみ閻竈神くわんかみであり、貴船神社の祭神は高竈神（あるいは閻竈神、罔象女神）であって、スサノヲではない。ただし、これらの神はいずれも水神であり、雨を請うためにも雨を止めるためにもふさわしい神である。

謡曲「絵馬」と奉幣記事に共通したスサノヲの不在が何を意味するのか、

謡曲では作劇上の演出、あるいは登場人物を絞らなければならない制約から説明できるかもしれない。しかし、もっと根本的な理由があるようにも⁵⁵思える。この点に関しては今後の課題である。もっとも貴船神社について言えば、貴船神社の中社にはスサノヲを祀っており、『黄船社秘書』にはスサノヲの名を挙げている。⁵⁶

ともかくも、以上のように考えれば、謡曲「絵馬」は「前場と後場で主題が分裂しており、酷評すれば支離滅裂の作である」どころか、きわめて首尾一貫し、明確な主題を持った作であると捉えることができるはずである。

注

- 1 この神話の呼び方にはいく通りかがあるが、以下では「天岩屋神話」と呼ぶことにする。
- 2 柳井己酉朔『天岩戸神話の研究』桜楓社 昭和五二年四月 五二頁。ただし、この分類は柳井のものではなく、倉野憲司によっている。
- 3 同種の儀礼に対しては「祈止雨」、「祈霽」、「祈晴」などと呼ばれるが、以下「祈止雨」で統一する。
- 4 高山林次郎「古事記神代巻の神話及歴史」、松本信広編『論集日本文化の起源』第三卷 平凡社 昭和四六年一月 九一頁。初出は『中央公論』第一四卷第三号 明治三二年。
- 5 同上 九三頁。
- 6 姉崎正治「素戔鳴尊の神話伝説」、前掲松本信広編『論集日本文化の起源』第三卷 一〇三頁。初出は『帝国文学』第五卷 第八、九、一一、一二号 明治三二年。
- 7 同上 一二二頁。

- 8 同上 一一二―一一三頁。
- 9 高木敏雄「素尊嵐神論」、前掲松本信広編『論集日本文化の起源』第三卷 一三二頁。初出は『帝国文学』第五卷第一、一二号 明治三二年。
- 10 同上 一四四頁。
- 11 『武田祐吉著作集』第三卷 角川書店 昭和四八年四月 二四二頁（初出は武田祐吉『古事記説話群の研究』明治書院 昭和二九年一〇月）。
- 12 同上 二四三頁。
- 13 同上 二四五頁。
- 14 同上 二四九頁。
- 15 西宮一民「スサノヲ神話の本質」、古事記学会編『古事記の神話』 高科書店 一九九三年六月（古事記研究大系四）。
- 16 古賀登『神話と古代文化』雄山閣 平成一六年九月。
- 17 同上 一一〇頁。
- 18 同上 一四八頁。
- 19 同上 一四八―一四九頁。
- 20 尾崎暢殃『萬葉論考』明治書院 昭和六一年一月 二六九頁。
- 21 折口信夫「大嘗祭の本義」、『折口信夫全集』第三卷 中央公論社 昭和四一年一月 二二九―二三三頁。ただし今は触れないが、折口説は実は先人の説を踏まえている。
- 22 そのことを述べた文献は枚挙に暇がないが、例えば真弓常忠『祭祀と歴史と文化』臨川書店 平成一四年四月 一八〇頁。
- 23 スサノヲを例えば〈スサノヲ＝水の神〉と規定してしまうことは、「とても狭いところ方になるのではなからうか。規定が狭ければその分だけ、規定からはみ出すことも多くなる。そしてはみ出したら、それは次の「矛盾」となる。これは悪循環と思われるのだがいかなものであろうか。」（山田永『古事記スサノヲの研究』新典社 平成一三年一〇月 二〇四頁）との見解があることは

承知している。筆者もすべてをその性格一つで説明できるとは考えていない。しかし、性格付けは必要なことだと考える。

- 24 古賀登前掲書 一一五頁。
- 25 坂本太郎他校注『日本書紀』上 岩波書店 昭和四二年三月（日本古典文学大系六七）五五九頁。
- 26 松村武雄『日本神話の研究』第三卷 培風館 昭和三〇年一月 三五頁。ただし松村自身は自然現象説には否定的で鎮魂祭説に傾いている。
- 27 戸谷高明「日本神話における宗像三女神」、「講座日本の神話」編集部編『高天原神話』有精堂出版 昭和五一年一月（講座日本の神話四）九一―一〇二頁。
- 28 佐野正己「スサノヲノミコトの系譜―大年神の神裔」、「講座日本の神話」編集部編『出雲神話』有精堂出版 昭和五一年一〇月（講座日本の神話五）一四四―一五二頁。
- 29 さらに述べると、娘をヤマタノオロチに奪われそうになる土地神「足名稚」「手名稚」の名義を吉野裕子は「足無ツチ」「手無ツチ」つまり「足無の霊」「手無の霊」であり、ともに蛇＝山の水神を表しているのとらえている（『山の神―易・五行と日本の原始蛇信仰』人文書院 一九八九年 四二頁）。
- 30 金子武雄『古事記神話の構成』桜楓社 昭和三八年一〇月 六二頁。
- 31 しかし、由来は新しく、例えば水止舞は元亨元（一三二一）年に始められたとされている（大田区教育委員会編刊『大田区史跡ガイド』一九八二年一頁）。
- 32 岩井宏実、神山登『日本の絵馬』河原書店 昭和四五年一〇月 六―七頁。
- 33 柳田國男「テルテルバウズについて」、『定本柳田國男集』第三一卷 新装版 筑摩書房 昭和四五年一二月 二六二―二六四頁。なお、初出は『小学国語読本総合研究』巻二―一 岩波書店 昭和一一年一〇月。
- 34 宮田登『王権と日和見』吉川弘文館 二〇〇六年一月（宮田登日本を語る 一〇）一一八―一一九頁。初出は「日和見から日知り（聖）へ―民俗学的王権論」、

- 『史境』三三二号 一九九六年三月。
- 35 野口武司「六国史所見の「祈雨・祈止雨」記事」、『國學院雜誌』八七卷一一号 昭和六一年一月 二一六―二五七頁。
- 36 並木和子「平安時代の祈雨奉幣」、二十二社研究会編『平安時代の神社と祭祀』国書刊行会 昭和六一年一月 一三五頁。
- 37 岩井宏実、神山登前掲書 五―六頁。
- 38 なお、中国にも同じように、祈雨とともに祈止雨儀礼が存在する。そのことについてはたとえば吹野安「中国古代止雨祝・発想考」(同『中国古代文学発想論』笠間書院 昭和六一年二月(笠間叢書二〇二))などが参考になる。中国からの影響も考えられる。
- 39 『謡曲大観』第五卷 明治書院 昭和六年四月 三四四―三四四三頁。
- 40 「普及公演・番組と解説」、『国立能楽堂』第五八号 昭和六三年六月 九頁。
- 41 金井清光「絵馬」、『能の研究』桜楓社 昭和四四年一〇月 二五五―二五六頁。初出は『観世』昭和四三年一月号。
- 42 米田真理「能〈絵馬〉の構想」、『名古屋大学国語国文学』八四号 一九九九年七月 六七―七七頁。
- 43 同上 七六頁。
- 44 樹下文隆「作品研究『絵馬』」、『観世』七四卷二号 平成一九年二月 二六―三四頁。
- 45 同上 三二頁。
- 46 同上 三四頁。
- 47 泉雄二『伊勢斎宮跡』同成社 二〇〇六年四月(日本の遺跡九) 一三七頁。
- 48 金田一京助が、学生が報じたとして記している次の説話がある。お大尽の家に一匹の馬がいた。その家の一人娘に迷った馬を家の者が殺してしまい、その皮を剥いで外回りの壁に掛けて干しておいたところ、今までの青空に、黒雲が湧いたかと思うと、一天俄かに掻き曇り、雷鳴が轟き、雨が降り注いだ。驚い

- ているうちに黒雲が降りて来、その内から観音様が現れて馬の皮で娘を連れ去ったという。どの地方に伝わる説話なのかも伝わらず、資料としての信頼性に欠けるが、オシラ様にかかわるものらしい。皮を剥ぐというところが天斑駒を連想させるが、それはともかく、雨と馬との関わりがここにも見られる(金田一京助「ひめこ繭」、同『北の人』角川書店 昭和二七年五月(角川文庫) 一六六―一六八頁。初出は『民俗学』昭和七年四月)。
- 49 また日蝕に対する儀礼でも赤毛の馬が用いられている。例えば『続日本紀』宝龜元年八月朔参照。
- 50 岩井宏実『絵馬』法政大学出版局 一九七四年五月(ものと人間の文化史) 一〇頁。
- 51 大井正『未開思惟と原始宗教―インドネシアにおける』未来社 一九七八年 一六三頁。
- 52 岩井宏実前掲書 一四頁。なお、そこには『内宮長暦送官符』伊勢荒祭宮料の条に木製馬形の仕様が克明に記されていることともに、月読宮に「鶴斑毛彫馬」が捧げられたことが見える。「鶴斑毛彫馬」と「天斑駒」との間に關係の有無に興味があるが、不明である。
- 53 岩井宏実前掲書 二二―二四頁。
- 54 同前 二九頁。
- 55 松前健は「スサノヲ自体は、とうてい古くからの伝承であるとは思えないのである。スサノヲがそれほど古くから宮廷に知られていたとすれば、当然この神が宮中の守り神の中に加えられていそうなものである」と述べている(『松前健著作集』第八巻出雲神話の形成 おうふう 平成一〇年五月 六〇頁)。同感である。
- 56 式内社研究会編『式内社調査報告』第一巻畿内一 皇學館大學出版部 昭和五四年二月 二二四頁、泉谷康夫執筆。

参考文献 注に挙げた以外に以下の文献を参照した。

- 荒川理恵「天の斑馬とスサノヲ」、『学習院大学国語国文学会誌』三九号 一九九六年
- 泉谷康夫「貴布禰縁起について」、瀧川政次郎先生米寿記念論文集刊行会編『神道史論叢—瀧川政次郎先生米寿記念論文集』国書刊行会 昭和五十九年五月
- 鎌田東二「絵馬」と神楽とアメノウズメ、『観世』七四巻一号 平成一九年一月
- 北野達「神話と祭祀—スサノヲの暴虐と大祓」、古事記学会編『古事記の世界』上 高科書店 一九九六年九月（古事記研究大系一一）
- 甲田利雄『平安朝臨時公事略解』続群書類従完成会 昭和五十六年九月
- 西條勉「スサノヲの追放と大祓—〈神代〉の論理構造に関して」、『国文学研究』七五集 昭和五十六年一〇月
- 佐々木隆「高天原神話—天岩屋戸神話の話型」、古事記学会編『古事記の神話』高科書店 一九九三年六月（古事記研究大系四）
- 志賀剛『式内社の研究』第二巻宮中・京中・大和編 雄山閣 昭和五十二年七月
- 棚木恵子「スサノヲ神話の構想」、『古代研究』一五号訂正版 一九八三年一〇月
- 長野正著刊『日本古代王権と神話伝承の研究』昭和六〇年九月
- 肥後和男『古代伝承研究』河出書房 昭和一三年九月（日佛社会学会編社会学研究叢書）
- 藤田嗣雄「地母神の礼拝と天石窟の変」、『天皇の起源』成文堂 一九六〇年一〇月
- 三村三千代「スサノヲ詩論」、上代文学研究会編『稲岡耕二先生還暦記念日本上代文学論集』塙書房 一九九〇年四月
- 河合隼雄、湯浅泰雄、吉田敦彦『日本神話の思想…スサノヲ論』新装版 ミネ

ルヴァ書房 一九九六年七月（Minerva 二二世紀ライブラリー二九）

* 文献の引用にあたっては旧字を新字に直した。また、研究文献に付されている圏点は原則として省略した。

* 以上はいわば非専門家の思いつきを蕪雑に記したに過ぎない。天岩屋神話Ⅱ祈止雨論は、筆者が一九七四年に早稲田大学第一文学部史学科日本史学専修の、今は亡き水野祐教授のもとに提出した卒業論文の中でごく簡単にほのめかしたことにともづいている。卒業論文の出来はきわめて不十分で恥ずかしいものだったが、三王朝交代説の大胆な提唱者である教授からは、祈止雨論の部分だけはおもしろいと評されたことを思い出す。それをもとに謡曲「絵馬」をも合わせて論を展開してみた。何分専門外のことであり、多くの間違いがあることであろう。ご批評をお願いしたい。

（なかにし ゆたか 文化創造学科）